研究

弥生町植松
愛宕神社の大鳥居と
霊峰尺間神社御神幸祭

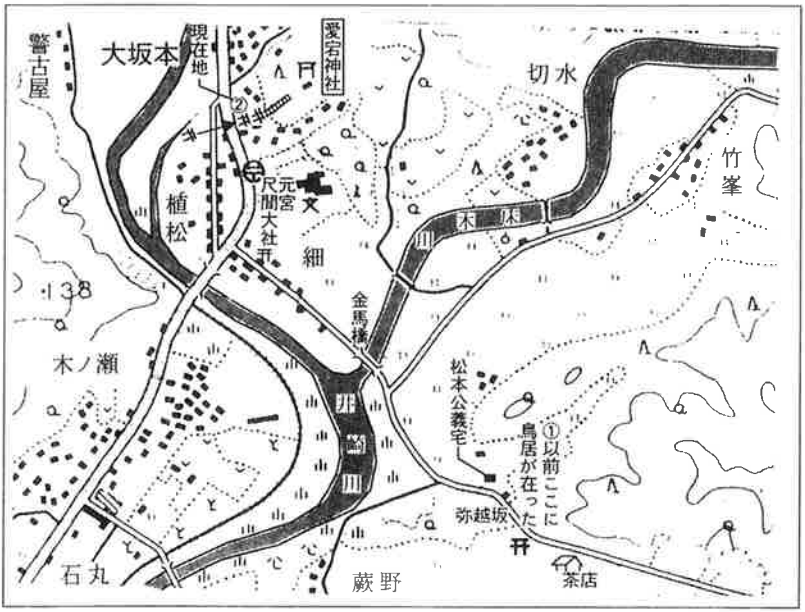
市野瀬　仁
（会員　佐伯市長島町）

一　大鳥居について

一　大鳥居創建の時・場所と移転について

鳥居は天保十年七月吉日（一八三九）十一代藩主毛利高泰の時に、鶴岡地区と弥生地区との境界の門前坂より四〇〇M下った弥越峠に建っていた。

ここは火尾山（愛宕神社の森）を眼下に眺められ、はるか尺間神宮の一の鳥居を仰ぐ所であったが、道路変更のため大正九年（一九二〇）大字大坂本と尺間の有志により現在地（移転二回目）に移転されたものであった。その間八十二年、弥越峠に建っていたことになる。



二　大鳥居の特色

①鳥居の左柱に創建の年代及び石工の氏名・出身地が明記されている。右柱には藩主の御山林方用達の代表者以下十名の名が連ねられている。大分県石造美術研究会長軸丸勇氏は「こうした例は県北の一部に見られるが、県南にはこの一基だけで、希少価値の高いものである」と言われた。

②先ず刻印された文字の格調高い書体が、彫りの深い彫刻とあいまって荘厳美を表し、参詣者に尊崇の念を与えてくれる逸品であると思われる。

三　歴史的背景

植松の愛宕神社は尺間神社を元宮とする新宮と言われているが、明治以降独立神社となった。（佐伯市史）

以下「豊後史談」によると

「慶長元年（一五九六）六月毎夜、釈魔嶽の方より一団の火焔が愛宕神社の森火尾山の方へ通ひけるに、里人らこれを見て大いに怪しみ、皆々何事ならむと恐れいたりしに或夜神託ありて、火尾山に勧請すべき旨仰せられければ里人大いに安堵の思いをなし、大神の氏子となる。

手前が弥越峠から移された天保10年の大鳥居。
向こうに見える新鳥居の両側に献燈籠、左手に紀念碑が見える。

【右柱】

奉獻

深津覚右衛門真美　金田平内方昌
吉田仂左衛門亮教　松木順助元平
浅田俊左衛門伸忠　御手洗権六義且
清田萬作貞勝
吉野彌一兵衛廣義
松木宇七郎元忠

御山林方用達
今城屋太一兵衛利成

【左柱】

天保十己亥歳七月吉日

磯邊屋彌兵衛　防州室津　石工

大坂本村、切畑村、上野村、下野村、古市村、上岡村六ケ村の住民いずれも相うち揃ひて神殿を造営したりき」とある。（弥生町史）

佐伯藩では、享保十三年（一七二八）六代藩主高慶公は愛宕神社参拝後、神社名称を愛宕大権現としたと神社提出資料に述べている。さらに

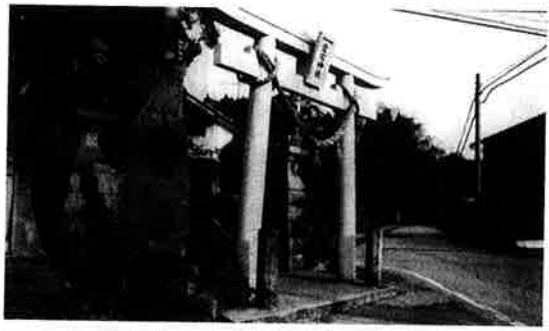
一、享保十六年、愛宕神社社殿を新築寄進された。

二、宝暦から明和（一七五一～七一）の頃、八代高標公は愛宕大権現の額面二ツを寄進した。

三、文化元年（一八〇四）六月、第十二代高謙公は愛宕神社より尺間神社までの間、四二本の道程表示を石柱にして寄進された。

以上のように佐伯藩は両神社に対して格別の配慮をしていることがうかがえる。それゆえ城下の五所明神社・若宮八幡社（佐伯市白潟）・大宮八幡社（佐伯市戸穴）等に匹敵する待遇を受けており、地方神社としては珍しい存在である。

二　献灯籠



【右】天保十一庚子歳
阿波屋弥兵衛
大　大塚屋又兵衛
嶋屋弥兵衛
炭問屋　世話人
清田長四郎貞盈
坂　富永快右衛門近定
九月吉祥日

【左】天保十一庚子歳
小西宇兵衛
大　河嶋屋仁兵衛
備前屋忠右衛門
炭問屋
和泉屋勘六
坂　田中重兵衛
油屋長兵衛
九月吉祥日

大鳥居建立なるや翌天保十一年、大坂の炭問屋と佐伯藩の炭問屋とが申し合わせて献燈したものと解せられる。「佐伯の殿様浦でもつ」と言われてきたが、同時に内陸部の林産物、とくに大坂炭問屋との交流が盛んであったことがうかがえる。

三　大正九年の紀念碑

紀念碑の右側に大正九年建立とある。弥越峠から八十二年ぶりに神社の前に移転した。

上段に移転の理由・次段に奉献篤志者の金額氏名・下段に地元発起人氏名・下段の左に建設者の棟梁、石工二名の記録がある。

残念なことに、一九〇余名の中、とくに下段は風雪に晒されて摩　滅して読めない箇所が多い。また、団体名・企業名・金額等も正確を欠くが、八十歳近い人なら知人も発見され感無量であると思う。

紀念碑　80余年の風雪に晒されて不鮮明な箇所が多い。

棟梁金田長二郎　佐伯町メジマ
石工古田惣太郎　明治村ワラビノ
斉藤傳治　臼杵

○最高金額者
土崎徳蔵　五拾円　トメダ
三拾円四名・二拾九円一名・二拾円六名
◇寄進者数は佐伯町・鶴岡村の順で多い

紀念碑奉献篤志者

【地域別数】

佐伯・南郡

佐伯町　四三
鶴岡　一四
上野　二七
切畑　七
床木　六
地元（大間）八三
（摩滅のため推定）
下堅田　一
八幡村　一

県内・県外

野津　一
臼杵　四
福岡　一
（尺間出身）
大阪　一
以上　一九〇余名

【業種別】

佐伯
山作製材所
青山・鶴岡
製材所
高山製材所
木許製材所
土木組連中

上野
上野白山組
最高高額者
五拾円
土崎徳蔵トメダ

大阪
椎茸同業組合

松本公義氏　88才
7才の頃鳥居の移転を見た人。自宅が近くにあり、略地図を即座に書きしるした頭脳の持ち主。

旧鳥居（元弥越）から一直線の位置（川岸）あった燈籠及び鳥居（新）。
ここより真正面約140Mに中心の大鳥居がある（この鳥居もここに移り二回目が現在地）。
愛宕神社の森が高く村を抱擁している。

平成十二年三月、以上の通り一応完成致したので、弥生町の有形文化財に認定していただきたいため、古藤田さんに提出致したが回答がないので、これ以上の候補があるとの感触を受けておるしだい。

四　霊峰尺間神社御神幸祭

私は最近になって、立派な大鳥居が弥越峠に立っていたことをどれほどの人が知っていただろうかと、疑問に思っている。又、歴代藩主が愛宕神社及び尺間神社に対してあれほど御寄進をしているのに、地元ではそれ相応の行事なり応対があったのだろうかと考えていた。

おりもおり平成十二年四月三日、霊峰尺間神社御神幸祭が挙行された。それは昔大旱魃のとき、雨乞い神事によって降雨を見たので、神恩に報いるための祭典であることを知った。

「季刊霊峰尺間神社」第5号

御神幸祭の行列　下段は衛藤征四郎代議士

写真にあるように、三十三年に一度の祭典があり、十四回目の四六二式年祭であった。この年は衛藤征四郎代議士の参加があり、「三十三年前には村上勇大臣が床木から尺間山に登って尺間神社に下り、馬に乗って宮司と共に長い長い行列の先頭になって愛宕神宮前に降りられたのだ」と、現在九六才になる荒木泉氏から聞いたのである。

私は行列前の大集会から前宮愛宕神社内での祈願執行

所の式の一日の行程行事に参加してみた。県内外からの参加人員・行列の数々に全く圧倒された。

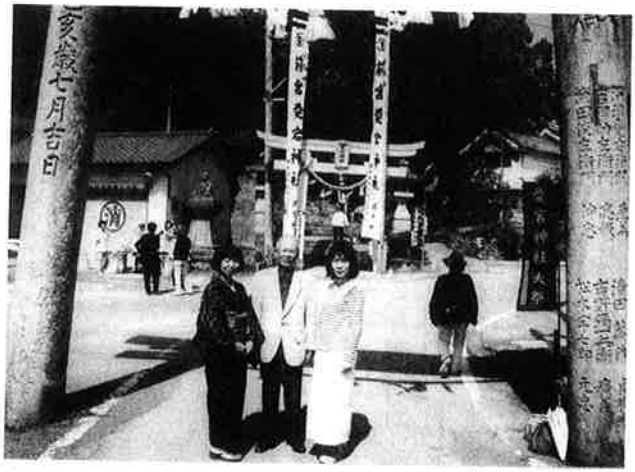
中でも尺間神社信仰者の日本詩道会宗家の深田光霊先生が大分から御参加、佐伯史談会の行事に参加していた豊南高校の郷土史クラブ員だった女生徒二名が、上浦町・臼杵からこのことを知って参加したのには感動した。またこれに対する莫大な準備・出資は想像以上のものがあったと聞いている。

私は大鳥居の豪華さは神に対する信仰としての象徴であったのではなかろうかと思っている。

村上勇氏　伊勢神宮の遷宮式に衣冠束帯姿で参列をする（昭和48年）

〔表紙写真解説〕

愛宕神社は歴代藩主から軍神社として尊崇され寄進を受けてきました。年々の神事と三十三年ごとの式年祭が伝統行事になっています。寄進された鳥居や石灯籠は人々の信仰の歴史を今に伝えています。



【参考文献】

- 「季刊霊峰尺間神社第五号」尺間神社広報部発行
- 「元田の歴史」元田の歴史編さん委員会
- 「大分県地方史」大分県南部の国道10号線における都市化について・主として弥生の場合・矢野彌生